

## 幼稚園児と保育学生の交流活動に関する一考察

### — 幼稚園教員へのインタビュー調査から —

## A Consideration of the Interaction between Kindergarten Children and Students Learning Childcare — Through the Interview to the Kindergarten Teacher —

栗岡 洋美\*

Hiromi KURIOKA

### 要約

本稿は、保育者養成校の学生と幼稚園児との関わりのあるあり方の一考察として、大学祭でのステージ発表「けん玉&ダンスパフォーマンス」に取り組んだ実践内容をまとめたものである。取り組みの様子や幼稚園教員へのインタビューから、繰り返し関わることと、両教員の主体性と、両教員同士が交流時以外の園児や学生の姿を伝え合う等のコミュニケーションを図ることが、双方向的な交流の要素として重要であることが分かった。

### キーワード:

幼稚園児、幼稚園教員、保育学生、関わり

### I. はじめに(問題・目的)

保育者養成校において、学生が実践力を豊かに身に付けることは必須課題となっている。そこで本学では、敷地内に附属幼稚園を併設しているという好環境を活かして、園児との関わりを通じた授業を実践している。

筆者が担当する本学保育科の授業科目「保育実践演習(ゼミ)」においては、3年間、附属幼稚園との交流活動を取り入れてきた。しかしながら今までは、学生が事前に準備した絵本を読んだり、遊びを設定したり、けん玉を教えたりする活動や、園児が学生に劇やけん玉を披露する活動など、関わり方が一方的であった。

大学の授業科目において学外実習の機会を設けることを扱った先行研究では、次の報告が見られる。増田(2014)は子どもや保護者が参加する講座(フィールドワーク)を設けて、学生が関わる機会をつくることの有効性について、学生が子どもと関わる喜びの質が変化することを示している<sup>1)</sup>。佐竹ら(2007)は、地域子ども達との食

育を通じての交流事業(サツマイモ収穫やそれを使ったお菓子教室等)の実践報告をしており、保育学生や製菓コース学生の専門性を活用し、子ども達に対する食育を目的として活動する中で、保育学生にとっても食育を学ぶ良い機会となったことを示している<sup>2)</sup>。どちらも、学生が学外の人や場に関わることの有効性を示しているが、関わり方としては講座やイベントを提供する一方向的な体制がとられている。幼児との双方向的な交流については、田甫(2016)による楽器を通じた交流と陶芸ワークショップでの交流を分析した研究<sup>3)</sup>があり、両者にとって意義ある活動にするための4つの要素が示されている。しかしながら、このような幼児と学生で共同して進められた活動報告は少ない。

そこで筆者は、双方が主体的に取り組むことができる交流方法の研究が必要であると考え、4年目の「保育実践演習(ゼミ)」の活動の中で試みた。本稿では、その実践を報告し、関わり方の可能性を広げる一助にしたいと考える。

\*本学准教授

## II. 方法

### 1. 保育・教育実践の概要

2018年度本学短期大学部2年次保育科の「保育実践演習」受講者（栗岡洋美ゼミ生）9名と、附属幼稚園である中京幼稚園の園児との交流活動を実施した。在園児数は117名であるが、自由参加で途中の出入りも可能として実施したため、各回の参加人数の把握はできていない。

前期には、「くりくりらんど」の名称で、学生が劇や絵本などを事前に準備して見せに行く活動を8回実施した。この実践では全園児を対象とした。

後期の10、11月には、大学祭でのステージ発表に向けて一緒に活動をした。発表までの取り組みでは学生が園に訪問して一緒に活動し、本番の発表では園児が大学に来て大学主催のイベントに参加するかたちでおこなわれた。

今回の報告では、双方向の関わりを意識して取り組んだ大学祭に向けての活動を取り上げることにする。

### 2. インタビューについて

2019年3月に幼稚園教員3名（年長担任2名、主任1名）を対象にしたフォーカス・グループ・インタビューを実施した。大学祭のステージ発表に向けての取り組みを振り返って、自由に感想を交流してもらい、その中から成果と課題を抽出した。筆者は、大学教員としてこの取り組みに関わったが、インタビューの際には、意見交流の内容を左右するような発言は避けるようにした。

### 3. インタビューに対する倫理的配慮

対象者には研究の主旨や配慮事項を口頭と文書で伝え、同意書にて同意を得たうえで実施した。同意書には、インタビュー中にも発言を拒否できることや、発言者が特定されないように扱われることが明記されている。なお、本研究は、本学研究倫理審査会による承認を受けている。

## III. 結果

### 1. 保育・教育実践

#### ①交流開始までの経過

8月にゼミの学生が集まり、大学祭のステージ発表に出場することが決められた。その後、内容を検討する際に担当教員より、「前期に附属幼稚園と関わってきたことを活かした内容はどうか」と提案をしたところ、学生の賛同が得られ、園児と一緒に発表をする意向が固められた。そして園児と一緒にできることを考える中で、けん玉遊びが浮上した。学生は前期にけん玉を使用して遊びの研究をし、全員が実際に遊んでみることで、その難しさや成功したときの喜びを経験している。一方、幼稚園でもここ数年、年長児が自分のけん玉を持って取り組むことが恒例になっていた。この年度の年長児も7月からけん玉遊びが始まっていた。

さらに、園児の取り組みやすさと学生の嗜好により、ダンスも取り入れることになり、発表内容が「けん玉&ダンスパフォーマンス」と定まった。

この決定を受けて、大学教員から幼稚園教員へ一緒にステージ発表をすることを依頼したところ、了承を得ることができた。幼稚園教員からは、「けん玉遊びは、これからさらに遊び込んでいこうと保育の中で計画されていることなので、子ども達の意欲を引き出す良い機会にしたい」と話があった。

#### ②発表内容

曲や具体的な内容が決まった時期は10月初めであった。内容を以下に記す。

1曲目はアニメ・クレヨンしんちゃんの映画主題歌「OLA!!」の曲に合わせて、ダンスとけん玉を年長児と一緒におこなう。大学祭の開催日は日曜日であるため、園児は強制参加ではなく自由参加とする。曲全体の3割はダンス、残りの7割はけん玉を入れた構成である。ダンス部分は、元々付けられている振りを参考に、少しアレンジをした。けん玉では、曲のリズムに合わせて玉を大皿と中皿とで行き来させる技を中心として、各々が

見せたい技に挑戦する内容も入れた。

2曲目は「ハッピー・ジャムジャム」の曲に合わせて、元々付けられている振りのダンスをおこなう。こちらはダンスのみで、年長以外の学年も対象となる。発表当日には、附属幼稚園児以外の子どもも来学しているので、その子どもも参加できるようにと考え、比較的簡単な振り付けで子どもがよく知っている曲が選ばれた。1曲目の終了後にアナウンスをしてその場で参加を呼び掛ける。

ここまで学生が決めたところで、学生リーダーが幼稚園教員と打ち合わせをした。学生側が考えた発表内容を伝えたり、交流の日程や方法を相談したりする中で、幼稚園教員から「きっと子ども達は喜んで取り組むと思います。」などと肯定的な意見が発言され、学生リーダーの自信と意欲が高められた様子が見られた。

### ③活動の様子

実際に交流をしたのは、10月22日、25日、29日、11月1日、2日、8日、12日の取り組み7回と発表1回の計8回である。

まず、初回は学生が園児に「けん玉&ダンスパフォーマンス」を見せて、「一緒に踊ろう」と呼びかけた。年少児や年中児でもダンスはすぐに真似して踊ることができていた。年長児はダンスよりも学生のけん玉の様子に影響を受けたようで、早速けん玉を持って来てやってみようとする姿が見られた。

その後の5回は、学生が3～6名、園の給食後の遊びの時間に訪問して、一緒に踊ったりけん玉をしたりした。滞在時間はおよそ30分から45分間程度であった。年長児の保育室では、できるようになったけん玉遊びの姿を学生が個々で見ながら一緒に遊んだり、学生を手本にしながらダンスとけん玉を音楽に合わせてやってみたりした。遊戯室では、学生が手本を示すかたちで全園児を対象として音楽に合わせてダンスを数回繰り返した。

学生が訪問しない日は、幼稚園教員によって曲を流すなど配慮されたため、遊びが継続されていた。そのため、学生が訪問すると、「もう踊れる

よ」「けん玉できるようになったよ」などと駆け寄ってくる園児の姿が見られた。

今回の活動は、学生も園児も一緒にステージの上に立つという点においては、どちらも主体的な取り組みであるといえる。しかしながら、発表内容については全て学生が決め、それを園児に伝えるかたちで進められてきた。その点においては、園側の受け身の姿勢が感じられたため、プレ発表前に、大学教員と幼稚園教員とで話し合う場を設けた。そこでは、交流時の様子を見た感想や、交流後の園児や学生の様子を伝え合った。交流時の様子は双方がおおよそ見ているため、確認し合うかたちで振り返った。各交流後の相手側の姿については、互いに見ていない様子であるため、「学生さんが帰った後、子ども達はこんなことを始めました。」「園から大学に戻る途中、学生はこんなことを話していました。」等の話は、それぞれの次の指導に役立つ情報となった。そのような話の中で、「ちょうど最近、子ども達から『こうしたい』という意見が出てきている」と幼稚園教員から発言があった。そこで、どのような意見が出てきているのかを聞き取り、後日学生に伝えた。学生は園児からの発言を受けて、それらの意見を可能な限り取り入れ、変更していくことにした。

11月12日には、全ゼミ生と全年長児が集まり、プレ発表として全体を通したり部分的にやってみたりした。その中でも、園児から「半分ずつ前に出てやるのはどう?」「ここでもう一つ技を入れたい」など意見が出てきた。学生はその意見にすぐに対応しきれなかったため、幼稚園教員が園児の意見を吸い上げて学生との橋渡しをした。最後の決めのポーズも園児の意見で決定した。学生は、出てくるアイデア一つ一つに感心しており、園児は自分達で考えたことが採用されて形になっていくことの充実感を感じている様子が伺えた。その後の両教員の打ち合わせ時には、幼稚園教員から「このプレ発表で意見を出し合って作り上げたことを機に、子ども達の意欲がさらに高まったようで、けん玉に取り組む姿が増えた」との報告があった。

11月18日の大学祭当日の年長児の参加者は13

名であった。2曲目は他学年の園児やその他来学者も含めて25名程の参加が見られた。

学生には、大学内外より流動的に老若男女が混在する大学祭という場で、園児の安全を最優先に考えて対応することも学びの一つであることを伝え、発表の20分前に年長児を控室で預かり、終了後に確実に保護者に返すための役割分担や流れを学生自身で考えるように指導した。学生は、集合時に名簿によって参加者を確認し、1列に並ぶかたちでステージまで連れて行くこと、その間に園児が人込みの中ではぐれないために、プレートを掲げて園児の目線からも行く方向が分かるようにすること、列の前後や中程に学生が分散して付いて行くこと、ステージ横に到着したら再度人数を確認すること、発表終了後は保護者にステージ横まで来てもらい確実に園児を保護者に引き渡すことなどを決めて、実施した。

発表の直前には、「来てくれてありがとう」「がんばろうね」と園児に声を掛ける学生の姿が見られた。園児は、はじめ、特別な場所で緊張する表情も見られたが、発表中には保護者や観客に見てもらって嬉しそうな表情に変わり、最後は大きなことをやり遂げた満足気な表情をしていた。学生は緊張感をもち、園児の様子を気遣いながら発表を成功させようと各々が動いていた。その分、終わった後はほっとした表情を浮かべ、「無事に終わってよかった」「子ども達は上手だったし、かわいかった」「一緒にできて楽しかった」などと感想を述べていた。

## 2. インタビュー

幼稚園教員3名に、大学祭とそれに関する活動を振り返っての感想を自由に話して頂いた。その一部を以下に記す。特に注目すべき発言に対して、筆者が下線を加えた。なお、振り返り①～⑤は途中で省略した部分はあるものの、一連である。内容のまとまりを分かりやすく記すために筆者が区切った。

### 振り返り①

筆者：大学祭の取り組みを振り返っての感想を話してください。やってみてどうでしたか？

A：大学生との関わりが、大学祭のためだけではなく、自然なスタートで関わりが始まったことがよかったと思います。

B：子どもはけん玉だけではなくて「くりくりらんど」でも来ていたお姉さんと関われるから、すごく親しみをもって関わっていて、躊躇することはなかったと思う。

大学祭での取り組みだけではなく、それ以前から関わっていたことが園児の安心感につながったのではないかと考えられる。繰り返し関わることの重要性が確認された。

### 振り返り②

C：7月から子ども達はけん玉を始めていたけれど、でもまだ9月に火はついていなかったという様子で…。そのようなときに、学生さんから「OLA!!」を教えてもらって子ども達の中に火がついた。やっぱり私達が個人的に見てあげるのには限界があって、そこで認めてあげられない子もお姉さんたちに認めてもらうことで、自信をもっている姿もあったと思う。

B：学生さんは本当にやさしく関わってくれていたのだから、そこにどうしようっていう子は全然なくて。見て欲しいばかりで、本当に。来てもらえることが嬉しいっていう感じがあった。「今日は来ないの?」とか「呼んできてよ」って子ども達が言うくらい。できる技も増えて、それも見て欲しい、見せたいっていう感じだった。

C：本当に見せたがっていたよね。学生さんはすごく褒めて認めてくれていた。変にガチガチにやろうっていう感じではなく、子どもがどんな感じかなあってさぐりながらやってくれていたのが良かったのかなって思う。ほどよい感じで。

B：けん玉が苦手だった子も「大学祭のステージ発表に出たい」ってなって、いろいろな方に見てもらったことでさらに自信がついて、終わってからもずっと継続してやっていく姿があったので、すごく良い取り組みになったなあって思う。

大学祭ステージ発表の企画や学生との関わりが、園児のけん玉への意欲の高まりにつながったことが伺える。特に、大学祭という特別な場であったことと、個別での認め言葉が効果的であったと思われる。そしてこの振り返りからも、繰り返し関わることで双方につながっていったことが感じられる。

振り返り③

C: そうやって繰り返しの遊びにつながっていったし、自然な流れで大学祭の発表があったという感じ。それから、大学祭での発表を12月の参観日につなげることもできた。本当に一時だけのけん玉ではなくて1年かけてやって感じて。3学期も活動の合間やトイレを待っているときに「けん玉をやっといい？」と子どもの口から出てくるくらい、なんだかけん玉が友達みたいに。そんな感じでやっていたのですごく良かったと思う。

Aちゃんのお母さんはAちゃんが頑張っている姿を見て、大学祭に絶対に出させてあげたいって言ってみえたんだよね？

B: はい。Aちゃんは、最初、けん玉がなかなかできなかったけれど、頑張っていて。お母さんがこれだけ一生懸命に頑張っているから…と大学祭に来てくださった。そういうこともあって、その後の参観日で保護者がけん玉をする機会を作ったのだけれど、お母さん達がすごく良い反応で。子どもと一緒にって一生懸命にやってくださって。つながっていったなあって思う。

幼稚園教員が、発表のための練習という意識ではなく、今回の企画を保育に取り込んで活かしていく姿勢をもっていったことが伺える。具体的な内容としては、幼稚園教育要領にも示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中の「自立心」が育つ機会と捉えて、日々の保育の中でけん玉の遊びが繰り返しできる環境をつくったり（振り返り②）、園での行事に結びつけて継続的に取り組むことができる仕組みをつくったり、保護者も巻き込んでの活動を企画して家庭との連携を図ったりしたことが挙げられる。幼稚

園教員が積極的に日々の保育とつなげていったことで、単発的なイベントのみの活動にはならなかったのではないかと考える。

振り返り④

C: 子どもが本当に楽しんでできていて。教えてもらうばかりじゃなかったから、きっと。「OLA!!」がすごく楽しみだったし、遊びの中でもどンドン自分達で考えを出し合って「いいねえ」とか言い合って進めていって、おもしろいことをやっていた。やらされている感じじゃなくて、本当に楽しいんだなというのがよく伝わってきた。やっぱり子どもがそこに気持ちがあってやっているから家でもそういう話をしているし、そうやって家庭ともつながって、お母さん達もあれだけたくさん大学祭に来てくださって…。すごいなぁと思った。

はじめから主体的に取り組もうとした（させた）というよりは、自分達の意見が反映されていったことで園児が充実感を感じ、それが結果的に主体的な活動につながったといえる。はじめは“教えてもらう”という受け身の姿勢が強かった園児の変容ぶりが伺える。

振り返り⑤

A: 大学祭では園と大学とのつながりをあのようなかたちで見せることができたということが、園にとっても大きかったかなと思う。良いかたちでコラボできたよね。

筆者: 今後の連携に向けて、何か改善点などありますか？

C: けん玉に今回取り組んでいく中で、お母さん達にはお便りで日々の子どもの様子を伝えていくことはできたけれど、それを学生さんにも見てもらうと自分達が保育の中でどこを大事にやっているのか、伝えることができるのかなと思う。

B: 事前に学生さんと打ち合わせて、学生はこれを大事にしていく、幼稚園側はこれを大事にしていく、そこでこれとこれは一緒に大事にしていこうみたいな話ができるといいかな。

幼稚園教員と学生がお互いの思いを伝え合うことで、双方向の関わりが充実がさらに高まるのではないかという意見が出された。その方法として、園のお便りを学生が読むことや直接双方が話す場を設けることが挙げられた。

#### IV. おわりに

今回の活動は、双方が主体的に取り組む交流活動の一つのかたちとして示すことができたと考えられる。一つのを一緒に作り上げる中での充実感や、自分が何らかの形で主体的に関わることができたことによる達成感が双方に得られたのではないだろうか。

田甫は、両者にとって意義ある活動にするためには次の4つの要素が重要であると述べている。

- ①幼児と大学生の身体的同調性（身体の動きやリズムがあう）が高いこと
- ②幼児と大学生とに双方向的な関わりがあること
- ③幼児の興味関心に沿ったことを媒介として交流を図ること
- ④大学生が幼児の興味関心を満たす能力をもち、幼児のモデルとなること

今回の実践は、結果的にこの4つの要素が満たされていたといえる。身体的同調性としてけん玉のリズムに合わせた動きやダンスが含まれた活動であったし、幼児の興味関心に沿ったこととしてけん玉があり、学生は全員けん玉ができる能力を備えてモデルとなっていた。よって、本実践は、田甫が示す要素からも両者にとって意義ある活動になったことが肯定されたと見てよいだろう。

双方向的な交流の重要な要素としては、繰り返し関わり、両教員が交流活動の機会を積極的に各々の保育・教育に活かす主体的な姿勢をもつことと、教員同士で交流時以外の園児や学生の様子を伝え合う等のコミュニケーションを図ることを今回の実践結果より挙げる。今回の実践では、途中に教員同士の話し合いの場を設けたことを機に、その後の取り組み方が好転した。幼稚園教員が学生の思いを知ったり、大学教員が園児の

つぶやきや変化の情報を得たりしたことが好転に影響したと考える。

今回は幼稚園側のインタビューでの検証が主であったため、今後は学生側の調査も実施していきたいと考える。

#### 謝辞

本研究に御協力いただきました、附属幼稚園の先生方に深く御礼申し上げます。

#### 文献（引用文献）

- 1) 増田吹子：“子どもとのかかわりを通じた学生の学び”，鹿児島純心女子短期大学研究紀要第44号，pp.37-47, 2014
- 2) 佐竹要平・平田安喜子：“食育を通じての短大と地域の子どもたちとの交流事業の展開”，長崎短期大学研究紀要19号，pp.43-52, 2007
- 3) 田甫綾野：“大学生と幼児との交流活動に関する質的研究”，玉川大学教育学部紀要，pp.81-100, 2016